

高校地理における観光を題材とした授業開発

——地域の人口減少問題に着目しながら——

菊 地 達 夫

I はじめに

現在、社会系教科では、観光の教材化に注目が集まりつつある。その背景に、国内外における観光産業の好調さがある¹⁾。近年、他国からの国際観光客の動向・様子を、報道する機会が増えている。国際観光客の動向では、アジア圏からの入り込み数が急増している²⁾。訪日外国人観光客の場合、韓国・中国からの入り込み数が多い³⁾。中国人観光客が日本製品を購入する旺盛な姿、いわゆる「爆買」現象は、一つの社会現象になっている。

このような観光産業や観光客の動向は、恰好の社会系教科の教材になるものの、授業開発研究の類は少ない。例えば、寺本（2015）は、小学校社会科「私たちの県のように」の単元において、ユニークな開発を示した。具体的には、自然、食べ物、歴史、生活文化、イベント、施設を指標として、観光資源の調べ学習を行い、観光行動を表す動詞を思考させ、旅の楽しみ方を立案した。学習効果として、観光資源から県の特徴が浮き彫りとなる点、旅の楽しみ方を立案させることで、言語活動の充実に役立つ点を示唆した。また、筆者（2014）は、幼稚園から高等学校までの地理的内容を中心に観光教材の可能性を体系化し、小学校社会科における授業開発を行った。その結果、観光教材が、幼稚園から高等学校まで、特別活動や小学校生活科を加えた社会系教科の地理的内容として体系化できることを浮き彫りとした。それゆえ、学校段階における授業開発の成果が待たれることを指摘した。

そこで、本稿は、高校地理における観光を題材とした授業開発を行うことを目的とする。以下では、高校地理における現行学習指導要領（地理歴史科地理）、検定済教科書の内容（地理A）から、観光の取り上げ方の傾向を示す。それをふまえて、新しい視点となる観光の教材化を目指し、開発授業の構想を示す。その対象は、地理Bの内容で行う。後でも触れるが、観光に関する内容は、地理Bでは少ない。また、授業開発した上で、観光の教材化の意義を改めて確認する。

II 高校地理における観光に関する内容

1 現行学習指導要領地理歴史編（地理）

地理Aでは、(1) 現代世界の特色と諸課題の地理的考察 ア 地球儀や地図からとらえる現代世界において、観光を取り上げている。具体的には、「国家間の結び付きについては、世界の国家群、貿易、交通・通信、観光の現状と動向に関する諸事象を様々な主題図などを基にとらえさせ、地理的情報の活用の方法が身に付くよう工夫すること」といった中で触れている。観光に関する解説では、個々の観光地や観光動向よりも観光を軸とした国際的な人々の移動を通じた地域や国家間のつながりという視点からとらえさせるようにするなど、工夫する必

要があると例示している。

続いて、(2) 生活圏の諸課題の地理的考察 ア 日常生活と結び付いた地図において、観光を取り上げている。具体的には、「身の回りにある様々な地図の収集」の中で、収集可能な地図として、観光案内図を例示している。

地理 A・B の共通では、地理的技能の具体例として、以下のような記述がみられる。地形図や市街図、道路地図、案内書の地図などに慣れ親しみ、どこをどのように行けばよいのか、見知らぬ地域について地図を頼りにして訪ね歩く技能を身に付けることとある。

以上から、高校地理の観光に関する内容は、次のような傾向にある。一つは、観光客の数値的变化や行動といった人を対象としたものを中心としていること。二つは、教材として、観光地図の活用を推進していること、である。

2 検定済教科書の内容例

T 社の場合、観光は、「観光を軸とした国際的な人々の移動」と題して、余暇を活用する人々の内容を掲載している。重要語句として、観光庁、観光立国、エコツーリズム、グリーンツーリズム、メディカルツーリズム、産業観光、文化観光、ニューツーリズム、BRICs が挙げられた。図表として、各国の観光客訪問先上位 5 か国・地域、国際観光収入・支出、日本人観光客者数と訪日外国人旅行者数、BRICs (ブラジル・ロシア・インド・中国) の観光客の主な出国先を掲載している。写真資料は、家電量販店のツーリストフロアの様子を紹介している。

内容的には、国際間の観光移動が活発していることを概観する一方で、観光産業が多岐にわたること、新しい観光の動きを取り上げている。また、観光客数の変化では、先進国だけではなく、新興国での急増がみられることを強調している。ゆえに、観光が、地球規模で広がっていることを示している。

他方、他の頁を含め、観光地図を内容として取り上げている場面はなかった。

III 観光を題材とした授業開発

本章では、現行学習指導要領の観光に関する方向性を活かしつつ、他の単元における観光を題材とした授業開発を行う。

授業開発は、地理 B「現代世界と日本」の単元で実施する。「現代世界と日本」は、地理学習のまとめの性格が強く、地理的諸課題を解決していこうとする探究的な学習活動を重視している。探究的な学習活動は、地域調査を主体とする。

今回は、地理的諸課題として、北海道における地域の人口減少問題を取り上げ、観光客の移動実態や観光まちづくりとの関連から、どのような解決ができるか、提案するというものである。最後に、定住人口の増加に向けた観光の役割を補足する。

以下では、地理的諸課題「北海道における地域の人口減少問題」の概要に触れ、授業構想を述べる。

1 地理的諸課題「北海道における地域の人口減少問題」の概要

周知のように、日本は、少子高齢化が進み、様々な地域問題が生じている。とくに、少子高

齢化の前例は、世界にはなく、諸外国は、日本がこの問題にどのように取り組むか、注視している。合わせて、少子高齢化問題との関連において、注目されているのは、地域の人口減少問題である。

増田（2014）によると、2014年、「日本創成会議／人口減少問題検討分科会」が、独自の将来推計人口として、「消滅可能性都市」の可能性を提言した。将来推計人口は、人口移動の社会増減、出生・死亡の自然増減といった2つの指標で決定する。具体的には、2010年の日本の総人口を100とした場合、2040年には83.8になると予想している。他方、北海道は、2040年に76.1、札幌大都市圏を除くと、67.7となり、全国平均より速く、人口減少が進むと予想されている。

また、人口再生産力の中心となる若年女性も、大幅に減少すると予想されている。若年女性が、50%以上減少する地域（消滅可能性都市）は、北海道の場合、78%が該当する。

加えて、地域圏においても差異があり、釧路圏・北見圏・十勝圏・旭川圏・札幌圏のうち、釧路圏が、周辺地域から拠点都市への流入が少ない上に、拠点都市から他の地域への流出が多くなると予想され、深刻さは高い。

2 授業構想

本単元は、日本の地理的諸課題を思考させ、課題設定や調査の流れを立案するようになっている。今回の授業構想では、地理的諸課題として「北海道における地域の人口減少問題」を予め提示し、解決に向けた調査内容や役割分担を決め、授業展開するものと想定した。

(1) 単元目標・計画

地理的諸課題「北海道における地域の人口減少問題」の解決について、グループ活動を主体として、調査内容・予想、手順、分担、記録（まとめ）などを通じて提言することができ、他のグループの意見を参考としながら、どのような解決手段が、現時点では有効性をもつか、理解することができる。

時間	単元内容
1 時間目	地理的諸課題の設定（グループ活動）
2・3 時間目	地理的諸課題の探究（地域調査活動）
4 時間目	地理的諸課題の探究のまとめ
5 時間目	地理的諸課題のまとめの発表（共有）
6 時間目（本時）	地理的諸課題解決に向けた解説（補足説明）

(2) 本時の授業計画

本時は、本単元のまとめとして、現時点でもっとも有効性がありそうな解決策を思考し、その内容理解を深める。高校生の場合、人口減少の解決策は、どのように流出を食い止めるか、または流入させるか、直接的な手段が多いと予想する。例えば、流出防止には、子育て環境の充実によって、人口の定着を促すこと、流入促進には、雇用環境の充実によって、域外からの就業希望者を募ることが示されよう。補足では、観光客の移動など観光的側面からの解決について取り上げる。観光的側面は、間接的な手段となり、高校生があまり着目しない内容と判断した。このような補足を加えることで、解決手段は、多様にあることを気付かせる。

1) 本時の目標

人口減少問題について、観光客の移動の側面から、課題解決の糸口に気づき、思考・理解することができる。

2) 本時の展開（標準 50 分授業）

	指示・発問	学習活動の評価	生徒に身に付けさせたい知識
導入 10 分 「3 分・7 分」	前時の確認 ・観光客の移動から、人口減少問題の解決ができないだろうか。	・発問に従い、自分の考えをノートに書く。 発表共有。 【意欲・思考】	・観光客は、地域に対して、興味関心のある層であることを理解できる。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> 学習課題：訪れる観光客を、将来、地域に居住してもらうには、どのような方法があるだろうか。 </div>			
展開 25 分 「6 分×4・1 分」	・学習課題について思考させる。 ・地域の魅力（観光情報）を伝えるには、どんな手段が有効であろうか。 ・滞在形態には、何か工夫ができないだろうか。 ・移住してもらうには、どのような支援が必要であろうか。	・学習課題について、自分の考えをノートに書く。発表共有。 【意欲・思考】 ・発問に従い、自分の考えをノートに書く。発表共有。 【意欲・思考】 ・発問に従い、自分の考えをノートに書く。発表共有。 【意欲・思考】 ・発問に従い、自分の考えをノートに書く。発表共有。 【意欲・思考】	・将来、居住してもらうには、地域の魅力を伝えることが重要であることを理解できる。 (リピーターの増加) ・観光情報は、リーフレットなど多様にあるので、地域住民からの発信が有効であることを理解できる。 ・地域住民が地域の魅力をしっかり理解できていることが前提であり、学習の機会の充実が大切であることを理解できる。 (地域住民による観光まちづくり) ・通常宿泊の場合、中長期となれば、費用が高くなる。中長期滞在に適切な宿泊施設の整備と情報発信が重要であることを理解できる。 ・居住施設の情報公開、生活する上での地域情報（移住支援）、地域住民との交流の場の設定といった、移住しやすい環境づくりが必要であることを理解できる。
まとめ 15 分 「5 分・10 分」	・観光客を、将来、地域に居住してもらうためには、どのような段階を踏むとよいであろうか。 ・北海道の地域人口の増加した実例を解説する。	・指示に従い、学習課題について、授業のまとめをノートに書く。 【知識理解】 ・事例解説について、しっかり聞くことができる。 【知識理解】	1 地域住民からの地域の魅力の発信ができること（おもてなしの充実） 2 短期滞在の設備やその情報の発信ができること（環境整備） 3 移住に向けた設備や情報発信を行い、支援できる体制を構築していくこと（環境整備） 北海道内では、ニセコ町や倶知安町において、外国人観光客の急増に続き、外国人の移住が増加し、地域の人口も増加した事実を理解できる。

3) 本時の評価

人口減少問題について、観光客の移動の側面から、具体的な事例を通じて、課題解決のあり

方を思考・理解することができる。

3 観光を題材とした授業開発の意義

すでに述べたように、観光は、関係する産業をみても多岐にわたる。他方、教科書の取扱う内容では、観光を直接的に取り上げる場面は少ない。観光に興味関心が低い教員の場合、観光は、限られた地理内容しか活用できないとの印象を与えかねない。

観光を題材とした授業開発は、多様な単元において実践できることを示していく必要性がある。その理由として、観光教材は、高校生にとって、比較的馴染みやすいことにある。他方、観光は、娯楽であり、それを教材化することに抵抗をもつ教員も存在する。いわゆる、観光教材は、授業内容として相応しくないのでは、という考えである。

そのような考えを払拭するため、どのような観光的内容を用いて教材化できるか、蓄積していくことが大切となる。

IV おわりに

本稿の目的は、高校地理における観光を題材とした授業開発を行うことであった。最後に、開発授業の内容をもとに、どのような部分に新規性や有効性があり、どのような課題が残されているか、触れておきたい。

観光は、地域の経済活動の活性化に有効との考えが強い。他方、地域の人口維持に、経済活動以外の面で、どのように貢献できるか、希薄であった。開発授業は、地理的諸課題として人口減少問題を取り上げ、その解決の一助として、観光的アプローチを示すことで、その可能性に気付くことができるものと考えた。新規性は、観光を直接的な教材として扱うのではなく、間接的な手段として援用する点にある。このようなアプローチは、他の内容でも転用できよう。例えば、防災やジオパークといった内容において、観光は、災害遺構や希少性ある自然環境の活用を通して教材化できる。さらに、発展として、理科をはじめとする教科連携の可能性も広がる。最終的に、様々な地域問題の解決として、地理的アプローチが有効性をもつことを理解させたい。

課題は、他地域からの観光客の流入、一時的や長期的な滞在（移住）の増加、それを対象とした新たな雇用創出といった好循環が発生する一方で、負の面にも気付かせることである。今回のような課題設定は、それ一点に絞るため、課題解決が実現することで、新たに生じる課題まで想定しにくい。地域問題の解決が進展しない理由は、その複雑さにある。本当の意味での多面的・多角的な考察には、正負の両面から思考させる必要がある。今回の開発授業は、両面からの思考が弱い。今後も、開発授業の内容を検証しつつ、質の高い授業にするべく、修正・改善を重ねていきたい。

注

- 1) 国際観光収入でみると、1990年の2,702億ドルから、2012年の10,780億ドルに増加した。また、国際観光客数でみると、1990年の436百万人から、2012年の1,035百万人に増加した。資料は、いずれもUNWTO資料。
- 2) 2013年の場合、アジア、ヨーロッパ、アフリカ、北米、南米、オセアニアのうち、アジアは、訪

日外国人観光客数の 78.3% に達している。資料は 2014 観光白書。

3) 2011 年の場合、韓国から 244 万人、中国から 141 万人となっている。資料は世界観光統計資料集。

文献

菊地達夫 (2014) : 観光を題材とした地理授業の系統化と開発 - 幼稚園等・小学校・中学校・高等学校の地理的内容・分野を通して -、北翔大学生涯学習システム学部研究紀要第 14 号、pp.1-14.

寺本潔 (2015) : 県の観光地 + 行動を表す動詞 = 旅の楽しみ方を考える授業、こどもと地図 2 学期号、pp.11-14.

増田寛也 (2014) : 『地方消滅』中公新書。人口減少問題において、観光客の移動の側面から、課題解決の糸口に気付くことができる。

文部科学省 (2010) : 『高等学校学習指導要領解説地理歴史編』教育出版。